

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2017年10月12日放送

「第33回日本臨床皮膚科医会 ② シンポジウム7-3

足爪疾患への最良の治療テクニックを目指して！」

皮膚科シューゾー
院長 河合 修三

はじめに

当院へ紹介を頂くことの多い足の疾患は、陥入爪、爪甲鉤彎症、鶏眼、胼胝です。これらの疾患に対して、当院で施術している治療内容を紹介します。

陥入爪で受診される方は、通常治療で改善しない症例が多く、その場合、個々の症例の状態に応じて、3 TO-VH0 爪矯正法かフェノール法の手術で対応できることがほとんどです。また、鬼塚法などの手術後に取り残した爪母から生えてくる爪棘に対しても、フェノール法を応用すれば完治させることができます。

個人的に、皮膚科医は、フスフレーガーが使用する高機能なグラインダーを持つ必要があると考えています。歯科医院にグラインダーが必ずあるように、皮膚科医もグラインダーを持って当然になることが理想です。爪甲鉤彎症などの肥厚した爪の対症療法は、グラインダーで薄く削ってニッパーでカットします。

鶏眼、胼胝は、クレドという皮を剥くような道具と、グラインダーを併用する治療を行っています。メスやクーパー、スピール膏の貼付だけでは鶏眼の芯の硬い部分の除去は難しいですが、グラインダーを使えば容易に除去することができます。



陥入爪

① 爪の彎曲とオーバーネイルの有無に基づく治療法の選択

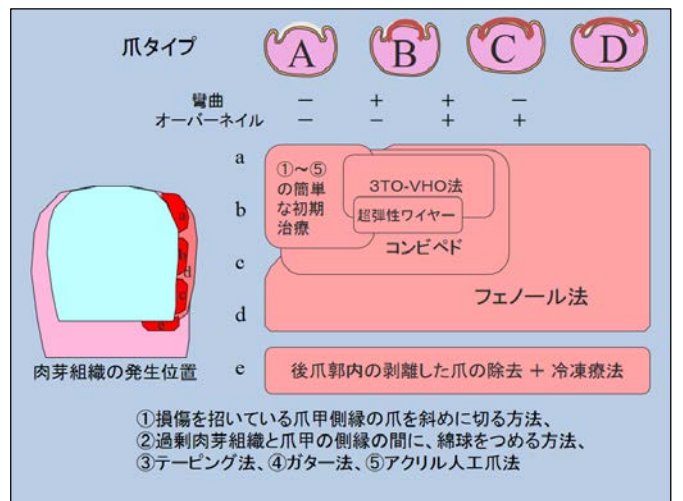
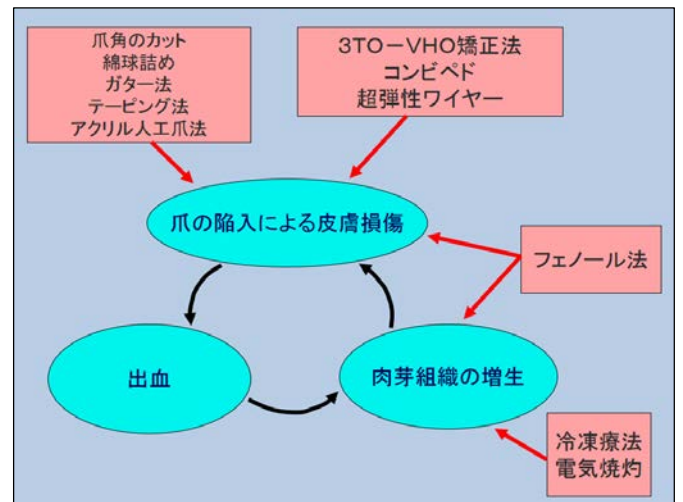
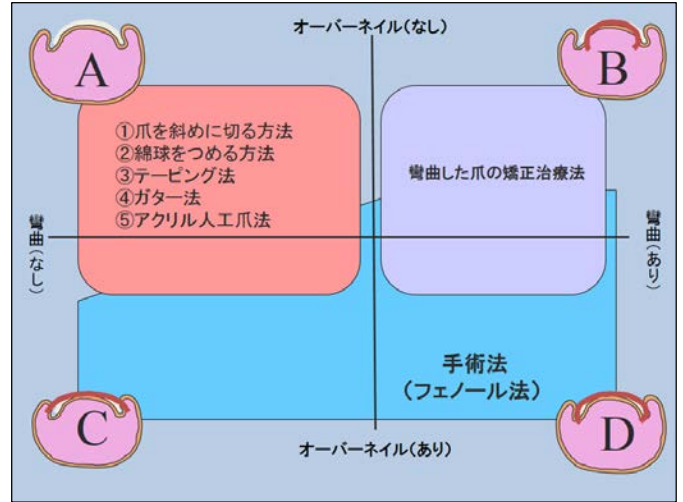
陥入爪の治療で重要なのは、問題点の状況を分析し、治療方法、予後、リスク、治療費

用を患者に説明し、患者の希望する治療を行うことです。痛みの直接原因である爪の陥入に対しては、爪の彎曲と爪のオーバーネイルの有無に基づいて治療法を選択します。爪の彎曲とオーバーネイルに問題がない正常爪であれば、簡単な初期治療（①損傷を招いている爪甲側縁の爪を斜めに切る方法、②綿球をつめる方法、③テーピング法、④ガター法、⑤アクリル人工爪法）で対応できます。しかし、彎曲がある場合は、この初期治療では十分な効果が得られないので、爪の矯正治療法が必要になります。矯正法の中では、超弾性ワイヤー法、3 TO-VHO 爪矯正法などのワイヤーを用いる方法が代表的です。一方、爪自体が、オーバーネイルの場合は、簡単な初期治療や爪の矯正治療法では問題の解決に繋がらないので、爪を縮小化させる手術法が最適です。

② 炎症性肉芽組織が増生する場合の治療法の選択

爪が陥入して皮膚が損傷すると出血し、爪の陥入が続くことで炎症性肉芽組織の過形成が発生する場合があります。発生した炎症性肉芽組織により、さらに爪の陥入を引き起こし、出血、炎症性肉芽組織の増生を繰り返すことにより悪循環が形成され難治性となります。そのため、通常の血管拡張性肉芽腫のように、肉芽組織の消退に対する治療のみでは効果が乏しく、同時に、爪の陥入に対する治療を施す必要があります。

爪の彎曲とオーバーネイルの有無に基づく治療法の選択に加え、炎症性肉芽組織の発生部位を考慮に入れるべきです。爪の彎曲とオーバーネイルがない場合で、先端の位置に炎症性肉芽組織が発生したときは、先ほど紹介した簡単な初期治療や、外用療法、冷凍療法、電気焼灼法の併用法で対応



できます。しかし、爪の彎曲がある場合は、陥入している爪を炎症性肉芽組織から引き離すために爪の矯正が必要になります。先端の位置に肉芽組織があれば、中央部分に 3T0 - VH0 法を施術し、爪の彎曲を改善させた後に、爪甲側縁の爪を斜めに切る方法や、ギター法を併用したり、残存する肉芽組織に冷凍療法を併用することで対応できます。一方、爪の中央の位置に肉芽組織がある場合は、この位置に 3T0 - VH0 法を施術しますと、ワイヤーの刺激で出血がおこり肉芽組織が増殖することもあり最適ではありません。この場合と、爪がオーバーネイルである場合は、爪の縮小化を図るためにフェノール法が最適となります。フェノール法は、爪の縮小化と同時に、フェノールによる血管閉鎖作用で出血を回避し、肉芽組織を腐食することができる一石二鳥の方法です。

炎症性肉芽組織が側爪郭ではなく、後爪郭に発生する場合があります。これは、爪母付近での爪甲の断裂、剥離に起因することが多く、Retronychia です。後爪郭内の断裂、剥離した爪甲をグラインダーで削ってからカットします。炎症性肉芽組織がある場合は、冷凍療法を行うと消退します。



Retronychia

③ 金属製矯正器具

本邦で、広く行われているワイヤー矯正法は、超弾性ワイヤー法です。ワイヤーの復元力で彎曲した爪を矯正する理にかなった方法です。しかし、この方法には多くの問題点があります。それは、伸びた爪にしか施術できないこと、伸びた爪に施術しても、爪が伸びるので邪魔になること、爪が割れるなどして破損しやすいので日常生活に支障がでること、などです。多くの場合は、耐久性が短く、1ヵ月毎の付け替えを余儀なくされます。超弾性ワイヤー法の様々な問題点を解決するワイヤー矯正法が 3T0 - VH0 法です。この方法は、爪の中央部分の両サイドにワイヤーを引っ搔け、中央部分をワイヤーで結ぶように締め上げて、陥入した爪を平坦に矯正する方法です。中央部分に施術するため、施術間隔が3ヶ月と長く、中には爪の伸びが遅く、6ヶ月間隔の場合もあります。深爪の場合も施術ができ、爪の肥厚が激しく超弾性ワイヤー法で広がらない場合でも、グラインダーで肥厚した爪を薄くしてから 3T0 - VH0 法を施術すると広がる場合が多いです。



④ 手術法

陥入爪の代表的な手術法は鬼塚法でしたが、近年、フェノール法に移行しています。鬼

塚法を代表とする手術法の問題点は、爪母の取り残しによる爪棘の発生と、手術後の痛み、醜痕になることがある点です。一方、フェノール法は、的確な施術を行えば再発がほとんどなく、手術後の痛みも軽度であり、術後の仕上がりも鬼塚法よりも綺麗な場合が多いです。しかし、爪縁が多少の変形を残す場合もあるので、予めその可能性を説明する必要があります。麻酔は、局所麻酔法ではなく、足趾ブロックの麻酔を行います。趾根部の左右に、足背側と足底側から計4ヶ所、1%塩酸リドカイン(エピネフリンなし)5~10mlで足趾ブロックの麻酔をしますと十分な麻酔の効果があります。フェノール法での治療後に、爪の縮小化に失敗する場合がありますが、これは、フェノールでの腐食時間が不十分であった可能性があります。フェノールを浸した綿棒での腐食時間を30秒間、5回行くと確実です。また、鬼塚法などの手術後に、爪母の取り残し部分から爪棘が発生する場合があります。この場合も、爪棘を剥離除去後に、フェノール法を行いますと爪棘の発生がなくなり治癒します。

爪甲鉤彎症

爪甲鉤彎症は、悪化すると羊の角のようになり、皮膚に刺さり潰瘍を形成し邪魔になります。通常の爪切りや、ニッパーを用いても切るのが困難なこともあります。麻酔を行い、爪を剥離除去する方法は、苦痛を伴い最適な方法ではありません。爪甲鉤彎症の多くは、爪床の前1/2~2/3は爪甲剥離の状態になり、前に伸びずに上に肥厚して伸びます。爪甲側から隆起した部分をグラインダーで削って薄くすると、ニッパーで簡単にカットできます。この方法であれば、患者が



苦痛を感じることなく施術できます。摩擦熱で熱傷を引き起こしたり、削りかすが飛び散るため、冷却水を噴霧するタイプの高機能なグラインダーを使用するとよいです。

鶏眼、胼胝

鶏眼、胼胝の治療は、クレドという皮を剥くような道具と、グラインダーを併用する方法が簡単です。メスやクーパー、スピール膏の貼付だけでは、鶏眼の芯の硬い部分の除去は難しいですが、グラインダーを使えば容易に除去することができます。胼胝で、肥厚が激しい場合は、まず、外科用クーパーで粗削りし、その後にクレドで削ります。鶏眼などの皮下に肥厚した部分は、グラインダーを使って削ると簡単です。外科用クーパーでの粗削りは、ある程度切り進めたら、刃先を皮下に向けずに、胼胝に押し当てながら、胼胝

の下の皮膚を切らないように周囲から剥離し、切り取ると出血を避けることができます。高齢者や糖尿病患者では、肥厚した胼胝の下の表皮が薄く脆弱している場合があり、切り過ぎに注意が必要です。胼胝の中央に鶏眼がある場合は、その部分だけ下方に切り進めると綺麗に切ることができます。